

<座談会の記録>創設の経緯と理念、今後の展開

著者	伊東 貴之, 井上 章一, 牛村 圭, 榎本 渉, 小松和彦, 白幡 洋三郎, 鈴木 貞美, 瀧井 一博
雑誌名	日文研
巻	49
ページ	7-58
発行年	2012-09-28
特集号タイトル	創立二十五周年記念特別号
URL	http://doi.org/10.15055/00004147

座談会の記録

創設の経緯と理念、今後の展開

二〇二一年二月一六日

パネリスト
伊東 貴之
井上 章一
牛村 圭
榎本 渉
小松 和彦
白幡洋三郎
鈴木 貞美
瀧井 一博
司会

瀧井 では、早速始めることにいたしました。皆様、お待ちいたしました。これから四回にわたって日文研二五年史の刊行に向けて、所員全員参加で座談会を行って、それを収録し、

来るべき二五年史に反映させていきたいと思っております。

きょうはその第一回目ということで、日文研の創設の経緯や理念、またそこから今後の展望みたいなことについて、ざっくばらんにお話しできたらと思っております。

当初の予定していたメンバーのうち、井上先生と小松先生がちょっと会議とバッティングしてしまいまして、すぐ後から来られると思います。

私、自己紹介が遅れましたけれども、司会を務めます瀧井でございます。

きょう、登場していただいている先生方のご紹介というものはおいおいしていくことにしまして、まずはそれぞれの参加者の先生にとっての日文研との出会いといえますか、最初の日文研とのコンタクトみたいなことについて一人ずつお話しただけだと、思っております。

最初は、日文研創設期からのメンバー、後で井上先生も来られますけれども、この場にはらっしゃるのは白幡先生ですので、まず最初に白幡先生から口火を切っていただいて、創設の頃の思い出とか、お話しただけならと思います。では白幡先生、お願いします。

白幡 では、手短に。私は、日文研に来る前、京都大学農学部林学科にいました。それで、日文研とのかかわりは詳しく言うとは長くなるし、たぶんいろんなところで出てくると思うので、ここでは概略を述べるに止めます。

私は、京都大学の人文科学研究所の共同研究会に参加してまして、その共同研究会の班長が吉田光邦という科学史の先生でした。そこに集まっている人間が文・教育学部から理・工・農学部まで、医学部もいましたけれど、文系から理系まで多分野にわたっていたんですね。その共同研究会に参加している縁で、梅棹忠夫さんの研究会の人たちとも知り合いになるとか、それから梅棹さんが館長の民族学博物館、既に日文研の先輩としてできていました共同利用研

ですよね。その共同研究会のメンバーにたくさん知り合いができるなどの縁で、そういう人たちの間で、何か日本文化研究のための研究所づくりの話があるというのを聞いたんですね。一九八三〜四年頃であったと思いますけれども。私はまだ助手でしたので、それは噂で聞くぐらいだったんです。そのうち、共同研究会のメンバーの中とか友人関係の中にそういう話がだんだん表立って出てきまして、それで一九八六年にこの日文研の創設準備室ができたときに、創設準備のための討議資料をつくったり、どんなふうに日文研の研究を進めてゆくか、実際に動いていったらどうなるかというような、応用問題を検討するグループ「ANOの会」ができたんですね。これは、人文研の教授だった山田慶児さんがキャップ役になって、勉強会という形でやっていました。このメンバーとして呼ばれた。その中心になっていたのは亡くなられた園田さんで、園田さんは創設準備室の次長をやっていて、大体東京で学者側のこういうふうにつくりたいというイメージと、役人の側からの金がないとか、何のためにそれが必要であるかとかという、いろんな質問が出されるわけですけど、その想定問答にどうやって答えるか、そのため園田さんは月に一回か二回帰ってきて、京都で理論武装のための勉強会をやって、懐に、どう言ったらいいのかな、おもしろく言うとか反論の実弾を持って、東京に戻って行ってパンパンと打つと。反対派がそんな研究所は要らんと言っても、完璧に反論できるように準備していました。組織・体制とか、予算とか、人員の数とか、年間の活動のスケジュールとか、成果の公表とか、いろいろなシミュレーションをやりました。ANOの会のメンバーに入っていて、そしてその成り行きもあって、日文研の創設準備にかかわることになり、結局、最初のスタッフに入れていただけでした。

その辺は、私は日文研創設一〇周年記念号のエッセイにもその一端について触れましたけれど

ど、今思えば創設前後は大変熱気にあふれていて、例えば一九八六年の五月の連休は、三日間ぐらいかけて延々と研究所のあり方を議論し、あらゆる点についての想定問答集をつくった思いがあります。今、日文研の研究活動全体を示す個人研究から共同研究、研究協力まで半円形の図がありますが、これはそのとき議論をした結果のまとめです。取りまとめは山田慶児さんがやってくれたんですけれど、それによって日文研は個人研究、一人一人の研究からほかの研究者のためにもやる研究協力まで、考えうるかぎりの研究方法を備えた組織であると位置づけられました。これまでにない組織である点を強調するような資料を一生懸命つくったというのが、特に初期の頃の思い出です。

創設で、一つだけ特に大事な問題として議論するのに苦労したのは、日本の大学のほとんどに国史、国文、いわゆる日本についての根本的な学問があるじゃないかと、なぜ日文研なんか要るのだという意見に対する答えです。有名な立派な大学に国史、国文という講座が全部あるんだから、それを組織がえしたり、あるいはその活動を刺激したりして、国際化とか、日本学の進展だとかというのはできるんじゃないかと言われたときに、なんで日文研でなければいけないのかという論理を必死でひねり出すのに、みんなでよく討議をしたなあという気がします。だけど、いまだによくわかりませんね。それでもいいんじゃないかと、思う面もありますね。極論ですが、いっぺん解体して、国史・国文に戻る（日本史、日本文学の名称一色になっていきますが）というのも別に悪いことではないと思ったりもします。ただ八五年、八六年頃には、やっぱり長く都であった京都市に、日本研究の一種のセンターをつくりたいという考えは皆の中に共有されているところであって、そして、ただしそれはどういうグループがその中心を担うかというのは、またいろいろその後の論議を生むことになったと思うんです。日本全国

にそれまで長い時間をかけてつくられてきた伝統ある「日文学」の諸分野、特に国史、国文とどう違うのかを説明するというのは、今でもそれは必要なことではないかなと思っています。以上です。

瀧井 ありがとうございます。では、古株の順ということで、次に鈴木先生に、同じように日文研との出会いといいますが、あと初期の頃のお話、思い出話みたいなものを若干していただけならと思います。よろしくお願います。

鈴木 創立メンバーには井上さんがいるので、そのお話を聞いてから出てこない話をしようと思っていたんですけども。

私は、三八歳ぐらいまでフリーランスで著述や編集などをやっていたのですね。そのうち、東洋大学に就職して、二年目か中西進先生からお話があったのですが、少なくとも二回はお断りしています。国立の日本文化の研究所ができたという話は知ってたんですけど、それ以上のことは、わけがわからない。とても自分の仕事が忙しくて、私なんかではとても務まりませんとお断りしたことをよく覚えています。とくに、すごく抵抗があったのは、私の場合は官になるということが、自分にとってどういうことなのかわからなかった。そんなことは露とも思っていなかったわけです。私立の大学に勤めたばかりで、自分の仕事を続けていければそれでいいと思ってたんです。私はフランス文学科を一応は卒業していますので、日本文学や文化について、基礎的なこともよく知らない。一九二〇年代以降についてなら、文学史、文化史をひっくりかえすようなことはやっていたわけですが、それでも、学恩のある先生はいて、その方に相談したところ、そのお話は受けなさいといわれた。官になること云々は、あんたが官僚組織とどう渡り合うかの話であって、何もそれにのみ込まれる必要はないではないか、という

ことを言われて、ああ、そういう考え方があるんだと気づかされた。それが一番思い出深いところですね。もうひとつは、研究所の創立にかかわるといふことはめったにないことだから、いい経験になるということも言ってもらったこと。これもふりかえてみて、そのとおりだと感じましたね。それで決断して、今、白幡さんの話にあったエミナースのところに、まだ日文研が動き出して一年もしてないところに家内と一緒に行って、梅原さんにはじめてお会いして、「おもしろいことをやりましょう」と温かく迎えていただきました。「ミスカストと言われないように頑張ります」とご挨拶をしたのですけど。しかしいったい、何をやっていいかわからないという状態が続きました。共同研究のお手伝いなどをしながらいろいろ考えていったわけですね。学際共同研究ってどうあるべきなのかなとか、そういうことを考えてきたわけですね。

というのも、各分野の偉い先生方の議論が空中戦をやっている。全然かみ合っていないことも多い。これは共同研究って言えるのか。それなりに絡み合った話ができなくて、しかたがない。私は、今、概念史の研究みたいなことをやっているのですが、その経験が非常に大きいですね。それぞれの分野でどういうふうな基本タームができているのかを知らずに自分の分野に引き寄せて議論して、それでいったい何が変わるのだろうか、という疑問に発しているのです。四、五年は、そういうことを考えていました。ただ、私はちょっと東京で仕事が多過ぎたので、毎週新幹線通ってたんですけど、それも若かったから出来たことですが、全体としては、とても自由で楽しかったことはまちがいない。

そして三つ目としては、日文研の創設に関して、どうしてもふれなきやいけない話をします。私は東京にいましたので、かなり批判的なことが飛び交っているのも知っていました。ひ

とつは東京中心主義からの反発です。もうひとつは官立、文部省のつくるものということに關して私立の人たちからはかなり反発がありました。また、左翼系の人びとは、ナシヨナリズムの拠点みたいになるんじゃないかという強い警戒を隠しませんでしたね。それらが社会科学者をうんと入れるとか、そういう注文になって出ていたのは知っています。活字に公然と出てきたのは二、三年たってからだと思いますけれども。新左翼系の人たちがやはりナシヨナリズムだという批判を、活字の上で行いましたね。「国際化という名のファシズム」だとか。それに対して、日文研の中の人たちはあんまり何も反応しなくて、それは「誤解だ」ということは言っていたのですけども、外ではっきり言ってくださったのは、立命館の西川長夫先生です。今、日本で国立の組織をつくって一つの思想に固まるわけがないじゃないかという、そういう反論をなさったことを覚えています。

それから、アメリカの酒井直樹が、日文研ヤマトイズムという批判をした。裏にバードサンクチュアリがあるのは日文研のものだとか何とか、間違いも含めてですが、それで日文研に来ていた若い外国人から自分は就職できなくなってしまうと心配して相談されたことがありました。だけど、そんなことはなくて彼はすぐに日本で就職しましたけれども。

それは、中曽根さんのお声がかりでできたことと、梅原さんに対する攻撃だったわけですけれど、梅原さんはいわばアイヌ文化基底説だったので、ヤマトイズムではないわけですから、よく中身を知らないナシヨナリズム批判が主だったわけです。

ですから、それらを払拭する努力も必要でした。酒井直樹もハルトゥーニアンも、一昨年でしたか、日文研に来てくれましたが、アメリカは私立とか州立が多いのでちょっと違うんですけど、外国の国立の大学や研究所はほとんど国家権力とくっついている。実際、そういうところ

が多いわけですね。工学部長になったら建設大臣か何かに横滑りするとか、そういう大学が多いわけです。それと日本はだいぶ違う。「学問の自由」が保障されているわけです。そのところが、よくわかっていない。日本の勉強をするなら日本の行政制度の仕組みぐらい少しは知っておいてよ、と言いたいんですけども。逆にアカデミズムが政治と離れ過ぎているところが、僕なんかは問題と思っているんですけども。

外務省の外郭団体である国際交流基金と私たちは協力関係をつくっていただけますけれども、私たちが担当しているのはあくまでも研究ですから、そこは相対的に独立した関係を保ってやっているわけです。逆に、かつて日文研は文部省直轄だった。だから行きたいという人も外国人の中にもたくさんいたでしょう。いまは、人間文化研究機構の一機関になっている。今日の日本の学問行政、文化行政の仕組みというようなことから、もう一回、自分たちのポジションを私たち自身が捉え直さないと。国内外におけるポジションを、たえず自分たちで自覚していることが必要ではないかなと思っています。

以上です。

瀧井 ありがとうございます。

たった今、駆けつけてくださったところなのにいきなりで申しわけありませんが、古参の方からということにしておりますので、次、小松先生のほうから、日文研との出会いについてざっくばらんにお話しいただけたらと思います。

小松 私は以前大阪大学に勤めていたんですね。一五年ほど勤めておりました、五〇歳のときにこちらに移ってきました。ですから、ちょうど一三年ぐらいになりました。

大阪大学をやめてこちらに移るといふことの一番大きな理由の一つは、大学の重点化、大学

院重点化に反対だったんですね。反対も断固反対ということをやっていたんですけれども、基本的には少数派でした。今、いろんな大学が重点化した結果、大学院生がそれこそ博士号を持った人がたくさんあふれていますが、こうなることはその頃からもうわかっていたんですね。そういう状態が来るだろうということがあったものですから、基本的にはこれからの大学院というのは、阪大は大変だろうなというふうに思っております。

しかも日本学科というちょっと変わったところにおりましたので、いろんなことを教えなきゃいけない。留学生も教えなきゃいけないし、博士課程まで学生を育てなきゃいけない。その上重点化したらとんでもないことになると思われました。だいぶ前からこちらの初代の所長の梅原や山折といった先生方とは、若い頃からちょっとお付き合いがありまして、共同研究会に時々来ておりました。大変興味深いなと思ったのは、みんな勝手なことを言っている人たちが一つのテーマのもとにいろんな意見を交わしていることでした。阪大の文学部は、何というんでしょうか、徒弟制的な講座制度が非常に優先したようなところでなかなか気軽に発言できない。そういうようなところにいたものですから、すごく伸び伸びとした、そういう意味では自分の考え方を遠慮なくしゃべれるところだなあというふうに思っております。

縁あって声をかけていただいたので、さきほど述べたようにやめる潮時と思っていたので、こちらのほうに来ました。日文研の定年まで一五年ありました。要するに振り返ってみると、阪大勤務が一五年、日文研勤務が一五年。一五年というのは相当長い。あつという間に過ぎちゃったんですが、当時はいろんなことができるだろうなと思って、自分が阪大ではできなさそうな科研の共同研究であるとか、あるいはそのものになるような所内の共同研究会を、自由にある意味では誰にも文句言われずに行うことができるというふうに思ってやってまいりました。

た。ただ、どの程度そのときに考えたことが実現できたかというところ、半分ぐらいだろうと思っていますが。当時はそういう共同研究会というものに対する憧れみたいなものを実現させるためにやってきたんだろうというふうに思っています。

実は、共同研究会というのは、僕は人類学とか民俗学をやっていたので、既に民博の共同研究会のメンバーになったり、歴博の共同研究会のメンバーになったりして、経験はあったんですね。ただ、共同研究会というのはどうしても、最初のうちは幅広くいろんな人を集めるんですけども、だんだんと、気がつくとも、これもそういうことが起きているんじゃないかと心配してるんですが、同じ人がずっと共同研究会のメンバーになって、気がついたら一〇年以上も、メンバーがそんなに変わらないような形になります。と同時に、メンバーが小さくなっていくんですね。僕は驚いたんですけど、ある機関の共同研究会に数年ほど前に特別ゲスト、ゲストスピーカーとして行ったときに、フルメンバーの三分の二はほとんど常時来ていない。そして、常時来ているのは、その大学院生と若手というようなことになっていて、私がしゃべったときは、本当に正規のメンバーは十数人いるんですけども、きょう集まっているのは五人です。五人のうち恐らく一人を除いて大学院生だったんじゃないでしょうかね。ですから、よほど緊張関係を持って、そして、一生懸命いろんな人に参加してもらえような形でやらないとああいうふうになるのかなあというふうに思いました。これはいろんなところの共同研究会が、ここ日文研もそういう可能性を持っているわけですけども、何というんでしょうかね、いろんなところで共同研究会が行われるようになる、ついついつまらないうところに面倒くさくなって行かなくなるというように、起こるんじゃないかというのを心配しながら、自分の研究会がそうならないように一応は努力してまいりました。

ただ、自分の研究会に一生懸命なために、隣にある研究会にあまりなかなかな顔を出すことができないのが、ちょっと自分では申しわけないなあと反省もしております。共同研究会というものが日文研の柱です。そして、外から見たときに日文研らしく見える研究会をどうやって維持していくか。そのところが一番大事だと思っております。

そんなところで、とりあえずいいですか。

瀧井 ありがとうございます。

では、井上先生も駆けつけてくださいましたので、よろしくお願いします。井上先生は創設期のメンバーですので、創設の頃の思い出話みたいなことを、お話しただけならと思います。

井上 これから申し上げることは、僕の頭の中に浮かんだ絵なので歪みはあるかもしれませんが、それはお断りしておきます。

私が強調したいのは、この研究所は、京都市の支えがあつて、できたんだということですね。桑原武夫と梅原猛が京都市に、日本文化研究所をつくれと長い間言ってきました。その京都市が文部省に掛け合っていて、時期がめぐってきてできたわけです。そのことを鮮やかに示している事例を言います。僕の知っている範囲で日文研の候補立地は四つありました。宝ヶ池と蹴上と今の五条のガスタンクの跡地と、それからここです。僕は当時文部省に出向いていた園田さんから、蹴上へ建物を建てる運びになったから、その図面を描いてくれと頼まれたことがあります。昔、建築の心得があつたので、簡単な図面を描きました。そのあと、園田さんから「いや、蹴上の話はなくなつた」と言われたことを覚えています。

実をいうと京田辺、当時は京田辺と言っていなかったですが、関西学術研究都市からも誘致

の声は上がりました。ですが、あそこは京都市ではありません。もし関西学術研究都市、正式名称はそれでいいのか。あそこを、候補地にすれば、もう京都市という枠は超えてしまいません。そうなると、当然首都圏が立候補するでしょう。ぜひうちへ日文研を招きたいという声を上げると思います。そうなつては収拾がつかないから、京都市から敷地を外すことはできないと強く言われたことを覚えています。それで、京都市の周辺をあつち行ったりこち行ったりして、まあ、ここに落ち着く。ここなんか本当に端っこの端ですけれども、ぎりぎり京都市という構えを保つことができたのを覚えています。

前にも申し上げたことがあるかもしれませんが言います。どうしてこんな僻地にしたんだと、当時交通機関が何もありませんでしたから、公用車で送り迎えされている梅原所長にほやいたことがあります。ぼやきついでに、「まさか梅原さん、比叡山の最澄と張り合うつもりではないでしょうね」というふうにお尋ねしたんですよ。からかいとおべっかを、半分ずつまぜてね。すると梅原さん、「君、その話は人前でするな」と言わはった。「ああ、この人は本気で最澄と張り合っていたのか」と、そう思ったことを覚えています。

こういう場で堂々と語っていいものかどうか、迷いますが、これも言いましょう。それは違うと白幡さんが思われれば改めてほしいのですが、私はやはり、桑原武夫の存在が大きいと思います。桑原さんが京大をやめられたときに、たぶん中曽根康弘から——たぶんではない、中曽根さんから、彼がやっている学校って拓大やったっけ。拓大から誘われたんですよ。そのときに、当時の桑原さんは彼を小僧っ子扱いしていましたから、断らられました。その中曽根さんに今度は桑原さんが日文研をつくってくれと頼まんらんようになったわけです。

日文研をつくるために中曽根康弘をまねく京都会議が桑原、梅原、梅棹、上山、今西の五人

をホストに行われました。この集まりの勘どころは、これ、私の想像ですが、昔、中曽根康弘を袖にした桑原武夫が彼の前で「すみませんが日文研をよろしくお願いします」と挨拶するころにあったと思います。そこが、政治的なドラマツルギーのクライマックスだったと思います。そして、桑原さんは、梅原さんからの伝言によると、なかなかそれを切り出せずに話を左に右にしたという。梅原さんはイライラしたらしいんですけど、最終的に桑原武夫がこしらえてほしいというのを頼むと、中曽根康弘がやりましようと言う。——みんなそれでほっとしたんですね。ほっとしたというふうに聞きました。やっと言うてくれたというふうに。私は、これも邪推ついでですが、これで桑原先生の文化勲章はすこし早くなっただんじやないかと思っています。

このことをきっかけとしているのかどうかは知りませんが、桑原さんはそれ以降ますますいろんな意味で梅原先生に頼るようになっていって、梅棹さんをやらないがしろにしましたかもしれません。私は日文研ができてしばらくしたころに、梅棹忠夫と会ったことがあります。当時は、世間で梅梅戦争と言われていましたが、梅棹さんはそれを否定したはりました。「梅原が憎いんやない。桑のやつや」と。「桑」と言うたはりましたね。「桑原さん」と言うてなかつたですね。「桑」「桑」と言うて。ああ、すごいなあというふうに思いました。

梅原先生にも桑原さんにも、ここを国際日本文化研究の拠点にするおつもりは当初なかったと思います。とにかく日本の大学には日本文化研究をする講座がない。それをどこか国立で設けたいという思いがあっただけではないでしょうか。はじめは、外国の日本研究者が日本をどう扱うかということには、あまり大きい興味を持っておられなかったと思います。

民博には日本をフィールドとするヨーロッパやアメリカの民族学者がたくさん集っています。

た。だから、梅棹先生は外国の日本研究がおもしろいということを知ったはったんやと思いません。ここが国際性をうたうようになったのは、私は梅棹さんの置き土産ではないかと考えています。梅原さんにしてみたら、日文研をこしらえる、そのリーダーシップはもうとっていたわけですよ。そのときに、やや野党的だった梅棹さんの野党案も受け入れたという話ではないかなと考えています。度量の広い与党としてね。うらみがのこらぬようにという例の哲学が作動したんやないかな。

ついでにもう一つ言いますと、当時、梅棹忠夫は民博の横にもう一つ同じ規模の博物館をつくろうとしていました。産業技術史博物館です。ドイツにドイツミュージアムというのがありますよね。ドイツの近代産業史を見せる博物館です。リュッターマンさんなんかご存じやと思います。ああいう産業史、技術史の巨大な博物館を千里にこしらえようというわけです。そして、ここでは共同研究も行う。民博と同じように研究部門も設ける。

当時、京大人文研にいた吉田光邦という技術史の研究者を旗頭にして、そういう分野の研究者が結集する博物館をこしらえようとしていました。吉田光邦の助手が私だったわけです。この構想には結構リアリティーがあったと思います。文系なのに、七五〇〇万円という当時では考えられないような科研費がきました。文部省も「どうぞ、これで研究者のネットワークをこしらえてください」というような、そういう科研費だったと思います。その事務局を私がやっています。私はそれ以降、科研費はこりこりやと思うようになっていくのですが、その根っ子はそこにあります。もう、こういう事務処理は、勘弁してくれという。

こちらは大阪府によって支援されていました。大阪府の府民文化室が窓口になっていましたね。財政的にもある程度支えてもらっていましたし、のみならず、千里の万博記念公園にある

倉庫へ全国の産業機械の古いものを集めることも認めてもらっていました。これ、維持管理費、結構大変だったんですよ。橋下府知事になって、文化経費のカットで全部捨てられました。

産業技術史博物館構想にリアリティーがあったと思うのは、塩川正十郎が声をかけてきたんですよ。おもしろい構想だ。東大阪にこしらえるなら、自分が全力を尽くすが、やはり千里にこだわるかと。東大阪が塩爺の選挙区なんです。おれの選挙区にこしらえるなら、文藝族のドンである塩爺が支えると。まあまあ、政治というのはこういうもんなんでしょうね。

ところが、梅棹忠夫は、千里にこだわっていました。そして、吉田光邦先生は、自分を支えてくれている梅棹が裏切れない。結局、塩川正十郎のさそいにはのりませんでした。つまり、政治家から投げられてきた真ん中の打ちやすい直球を見送ったわけです。私は、そこで見送る吉田さんが好きでした。好きだし、見送ってくれて助かったとも思っているんです。そんなもんバットに当てられたらたまらんですよ。私なんか、それでかかりつきりになってしまふ。

当時、大阪府が推している産業技術史博物館と京都市が推している日本文化研究所は競り合っていました。身びいきもあるかもしれませんが、どちらかというと、産業技術史博物館のほうが文部省という官僚機構の中では上を行っていたと思います。だけれども、政治家の誘いに乗らなかつた吉田光邦と政治家を手玉にとつた梅原猛のどちらがサクセスストーリーを歩むかはもう決定的でした。これで吉田光邦を旗頭とする産業技術史博物館構想は、構想自体はその後生き残りますが、バブルがはじけた時期には可能性がなくなりました。

まだ、その産博構想が生きていた頃に、園田さんが私に「日文研へ来ないか。今度そういうのできるから来ないか」と声をかけてくれました。「梅原先生も君の本を読んでおもしろ

がってくれている。ぜひ来いよ」と。私は京大人文研の助手をしていました。いずれ出なければならぬ職場です。渡りに船だと思ひ、ありがとうございますというふうに答えていました。ところがしばらくして「あの話はなかったことにしてくれ。君の話は通らないかもしれない」と園田さんから言われました。「何ですか」とお尋ねすると「梅棹忠夫が、君が日文研へ行くことに反対している。井上をとられてしまうと、産業技術史博物館構想の肝いり役をやっている人間がおらんようになる。それは困る。今は井上を手放したくないと言っているのだ、すまんが、梅棹さんの顔もここでは立てないかんから、君、我慢してくれ」というふうに言われました。まあ、しょうがないかなあと思つたのですが、ここが何ていうか、人文研の先輩・後輩やね。私と園田さんは。ありがたいなと思つるのは、ちょっとごめんね。今、涙出そうになつてきた。

園田さんが、僕の師匠である吉田光邦に掛け合つてくれたんですよ。「吉田さん、申しわけないけども、あなたの助手、井上を日文研で横取りすることになると思うが、かまわないか」と。吉田さんは、これ、園田さんからの又聞きなので、ほんまはわからへんのですが、吉田さんは快く了承してくれたと。産博にとつては、産業技術史博物館にとつては痛いけれども、井上君の将来のためにはそれがいいだろうと言わはつたらしい。梅棹さんは反対していらつしゃつたんですが、井上君を園田・梅原側へ譲ることに同意してくれたという話を聞きまし

た。私はたぶん、いずれ産業技術史博物館の園田さんになつていたと思ひます。それができておればね。ですから、園田さんの亡くなられたことが身を切られるように、すいません。身を切られるようにつらいですね。園田さんのことをご存じない方もいらつしゃいますよ。

ちよつと自分で感傷に浸り過ぎているかもしれませぬ。ごめんなさい。

これも恩讐の彼方というところでしょうか。この建物ができ上がったときに、梅棹先生も招いて、お祝いのパーティーをやったんですよ。たまさか私が梅原先生の横にいたときでしたね。その私の横に梅棹さんが寄ってきはった。私は梅と梅の間に挟まれたんですよ。その梅と梅が「我々仲が悪いと言われるけど、そんなことないよなあ、梅原君」とか、そういうやりとりを始めたんですね。まあ、ほんまにやくざの親分同士みたいやなあ、かなわんなあと思ひました。

私は、一時代を築いた京都の大学者たちはやっぱり血が濃いなあと思ひますね。あの血が濃い人たちがこれをこしらえたんだとしみじみ思ひます。それと同時に、私のことはもうそんなのとは関係のないところにほったらかしといひてほしいというふう強く思ひますというこゝとで、當時を、途中で涙出てごめんなさいね。思ひ出話です。

瀧井 ありがとうございました。

井上 学問の話、なんにもしなかつたですね。

瀧井 いや、それでいいんです。一応この記録は全文起こして、二五年史に載せようというふうには思ひているんですけども。

井上 「桑」というところも。

瀧井 いや、あの、涙のところをどう載せようかとか、いろいろ。

もう既にこの座談会のいろいろなお膳立ては、今までの四先生のお話でそろつたようにも思ひますけれども、ここでほかの参加者の先生からも一言ずつ、日文研とのファーストコンタクトやファーストイメーヂみたいなことについて、ちよつとお話をいただけたらなと思ひます。

井上 ちよっとごめん。言い忘れた。何のため最初に京都市という話を振ったのかというところ、産業技術史博物館構想とくらべるためでした。こちらは、大阪府の構想だったんですよ。阪大から来ていらっしやる先生もいらっしやって言いにくいのです、かんべんして下さい。学術行政史には京都と大阪の戦いがありましたよね、これまでは。第三高校とか京都大学は京都にできました。つまり常に大阪が京都に出抜かれている歴史があつて、たぶんこれもその延長上に来る話なんじゃないかなという前振りのために申し上げたんですが、涙で忘れてしまいました。すいません。

瀧井 ありがとうございます。

今、鈴木先生のお話で、創設期にいろんな方面からたたかれたという話がありましたけれど、私も日文研との最初の出合いというのは受験生のと看で、大学受験したときに、京都大学で立看が確か立っていたと思うんです。日文研ナンセンスみたいなの、そんな感じですね。受験が終わって帰るとき、これ、新大阪の駅だっと思えますけど、新大阪の駅でも張り紙がしてあつて。日本史研究会かどこか忘れちゃったけれども、中曽根の野望を粉碎せよみたいな、そういう感じのチラシだったと思います。私はそのときに日本文化を国際的に研究する施設をつくるのが何で悪いんだろうということ、少年ながら思ったんですけれども、それが私自身が日文研という存在を、名前を知った最初でした。

一〇年ぐらい前に、まだ前任校にいたときに、ヨーロッパに出張で行って、そこでドイツの旧知の日本史の研究者と会ったんですね。そのときにどういふ脈絡か忘れちゃったけれども、日文研の話が出ました。そのときにその人が、我々の間で日文研というのは非常に評判が悪い、悪いイメージを持っているというふうなことを、ぼろっとおっしゃいました。それが、日文研

との二度目の接触みたいなものです。

にもかかわらず、その後、私が日文研に奉職することになるとは思いもよらなくて。ただ、私自身はここに職を得るまでに、ちょっと二つ、そういう印象的な出会いをしております。

ほかの先生方というのはいかががでしょうか。最初のインプレッションとか、どういうイメージを抱いていたかとかということ、またそれがどう反転したかとか、あるいはそのまま持続したかみたいなことについて、一言ずつお話しただけだと思います。

まず、牛村先生から。

牛村 牛村圭です。日文研ができたのは昭和六二年の五月。当時、私は大学院博士課程の三年生でした。博士課程から一応研究者ということにするならば、日文研の歴史と私の研究生活がほぼ重なっていると考えています。

実は今から六年前の四月一日にここに辞令をいただきに参りましたが、そのときが日文研に来た初めてでした。すなわち、それ以前に図書館を使ったこともなければ、共同研究に加わったこともなし。理由は簡単で、「勉強せざる者、日文研に入るべからず」と自分を律していたというのが主たる理由です。

初めて日文研へ来たときは、したがって正門のところまで深呼吸をし、自動ドアで深呼吸し、入って名乗りを上げようとしたが受付に誰もおらず、拍子抜けしたという記憶があります。ですので、辞令をもらう前はいわば塀の外の人、それから後は塀の中の人という日々を送っています。

長かった塀の外の人の時代のことを少しお話ししたいと思います。三点ほどあります。

一番最初に思いつくのは、師匠の一人である芳賀徹先生の笑顔ということです。昭和六一年

の初夏の頃だったと思います。比較文化という学部生の授業を先生が持っているとき、私は大学院生でしたけど、週に一回、顔を出していました。そのとき「今度、京都にこういう研究施設ができるんだ。例えば牛村圭という名前を入れてボンと押すと論文がずらずらずらっと出てくるんだぞ」と、うれしそうに話していらした。今では当たり前のことですけど、二〇数年前には非常にびっくりする話でした。やがて自分は東大を定年になったらそこに行くんだ、これで就職先も決まって万々歳だ、ということと話していらっしました。

実はその日、あるゲストを連れていらして、そのゲストというのはアメリカのジャーナリスト、ジェームズ・ファローズさんだったんです。驚くような組み合わせです。というのは、ジェームズ・ファローズはその二、三年後、『アトランティック・マンスリー』に「コンテニーング・ジャパン」(Containing Japan)という、「日本封じ込め」というジャパンバッシュャーたちの先端を行くような論文を発表しました。すなわち、東大に来たとき、ファローズは日本でそのための調査を行っていたということだったんです。

二つ目は、ほぼ同じ頃、やはり朝日新聞、さつき鈴木先生がお話しになった件ですが、朝日新聞が行っていた一連の日文研に対する反発キャンペーンというものです。すなわち「国策中心の日本研究所を京都に設立する動きがある。それに警戒せよ」というものを何度か読みました。

三点目はアメリカでの話です。昭和六三年の九月から三年間、北アメリカに行きました。一年目と三年目はシカゴ大学の大学院生、二年目はカナダで大学の客員教授をしていました。シカゴは、ちょうどさつきお話にあった酒井直樹さんがコーネルに移った後ですので、直接お会いすることはありませんでした。シカゴには、入江昭、ハリー・ハルトウーニアン、テツオ・ナ

ジタと三人の日本史研究者がいらっしやったんですが、私はその中の入江先生にとってもらった。ところが入江さんは、シカゴ最後の年になりますが、サバティカルでハーバードに行っただけで、授業をお持ちではない。必然的というか、結果として、ハルトゥーニアン、ナジタ、お二人のゼミに参加し、次第に親しく教えていただくということになりました。

ちょうど日本の世が昭和から平成に変わった一九八九年、その冬学期は週に一回、ナジタ先生のもとに行って、Supervised Readingとゆう、一冊の本について自分の考えをまとめて報告し、それについて質疑応答をするという個人授業を受けました。何でもいよいよと言われたので、選んだ本は、ピーター・デールの『ザ・ミス・オブ・ジャパニーズ・ユニークネス』(The Myth of Japanese Uniqueness)、日本人はユニークだという神話、というこれまた日本バッシュャーズの本なんですけど、それについて一章ずつ読んで報告をしていました。

ある日のこと、そのナジタ先生が、どういう脈絡かわかりませんが、日文研のことを話題にします。非常に学問に厳しい方でしたが、そのナジタ先生が深刻な顔して日文研の批判をするんです。今の記憶にあるのは、アウトレイジラス (outrageous) だという形容詞でした。語るその深刻な面持ちに私もつられて、「I promise I will not join such an institute in the future」と思わず言ってしまったというのが二九歳の私でした。

また、柄谷行人さんもシカゴに来られることがあって、なぜかその講演の端々で日文研の批判をする、という記憶もあったので、当時アメリカでの日文研の評判は甚だ悪しという印象を強く受けました。

日文研に関わった身近な方々としては、芳賀先生、また同じ東大の比較文学比較文化研究室の伊東俊太郎先生、さらに同窓先輩の上垣外憲一さん。博覧強記というよりも知的な極めて大

風呂敷というような方々が日文研のメンバーに加わってスタートしたかと思えます。

非常に申しわけないことに、ここに赴任するまでは、日文研でこれほど共同研究が盛んだということは、私は部外者としては知りませんでした。すなわち日文研はといえば、極めて優秀な学者が集う研究所という印象が強く、高校の頃読んだ柿本人麻呂の本の著者・梅原猛。大学二年生の頃は将来は中学校の教師になろう、科目は英語か体育か、放課後は陸上部の顧問、こう思っていたので、教育心理の本も読みました。その著書の一人が河合隼雄。さらに、本屋で見かけたおもしろい霊柩車の本の井上章一。東大・駒場の書籍部の棚で見つけた笠谷和比古、白幡洋三郎。こういったお名前を次々に覚え、ああ、こういう先生たちが日文研にはいるんだと知って、ここは学問の府なのだということ強く覚えていた記憶があります。

そのほか、こういう研究者がいるのだと知ると、その研究者がなぜかその次には日文研に移っている。例えば川勝平太さん、そして猪木武徳所長。佐藤卓己っているんだと思うと、今度は佐藤さんが日文研に来ていて。池内？ ああイスラムねと思うと、今度彼も来ていて。と気がついたら今度は自分の番だった、というのが日文研に来るまでの様子でした。

共同研究については知らずと申しましたが、研究協力が行われていたことは、うわさには伺っていました。例えば大学院生の頃、チューターで三人の外国人を担当しましたが、多少自慢げに言うと、そのうち二人が日文研の外国人研究員になりました。一人は今いらしている韓国のス・ザイゴン（徐載坤）さん、もう一人は既に数年前ですけどいらしていた韓国のイム・ヨンテック（林容澤）さん。という方々を通して、研究協力することも聞いてました。

以上がここに伺うまでの日文研との接触ということです。

瀧井 ありがとうございます。では、次は伊東先生、お願いします。

伊東 ただいまご紹介にあずかりました伊東と申します。

私は、年代的にはたぶん牛村先生と瀧井先生の真ん中ぐらいいかなあと思うんですが、ですから大体学生時代か大学院生時代ぐらいいに、ちょうど日文研が創立、創設されたというぐらいいに当たっております。

先ほど来いろんな先生方のお話にありましたように、当初いろんな批判とか懸念のようなものも若干あったというようなことも存じていますけれども、個人的に印象的だったのは、しばらくしてからだと思うんですが、たまたま私、あるご縁で学生時代から鈴木貞美先生は存じ上げておりました、ちょっと私の記憶が間違っていたら大変恐縮なんですが、鈴木先生が、当時出ていたある同人誌とか文芸誌に、「杼」という雑誌だったと思うんですけども、エッセイをお書きになっておられました。そのエッセイでご自分が関東から今度京都に行かれるということ、それから、官につくことになったというようなことをちょっと茶化しながら書かれていたのをよく印象的に覚えています。

そして、その後もいろんな先生方の本を読ませていただいたりとか、私自身は中国思想史が専門ですので、日本研究ではないんですが、今谷先生、笠谷先生とか園田先生のご本を読ませていただいていますし、井上章一先生の本なんかも非常におもしろく読ませていただいています。随分いろんな方々がいらっしやるんだなあというふうには思っております。自分自身が中国研究ということもありますし、もちろん山田慶兒先生とか、井波律子先生とか、すぐれた中国研究者の先学の方がいらっしやったことも存じ上げておりますが、そういつては何ですが、日文研というのはやはり日本研究のメッカで、また京都大学とか関西方面の方が多い研究所だというイメージがありました。私は東夷と申しましようか、関東の方からやってきたので、まさ

か自分が、今年度からというか、昨年の四月に着任したんですが、自分にお声がかかって奉職することになるとは思ってもおりませんでした。

コンタクトとしては、奉職する以前に一回だけ、もう一〇年以上前になりますが、芳賀徹先生の研究会に、別に私が呼ばれたわけではなくて、そのとき、どういふ名称の研究会だったか大変失礼ながらちょっと失念してしまったのですが、もうお二方とも亡くなりましたけれど、一人はやはり中国思想史で京都大学でずっと教鞭をとっておられた島田虔次先生がお話になられる。それから、私の師匠である溝口雄三という方で、この方も昨年亡くなられたんですが、お話になられるということがございました。細かい話は省きますが、別にお二人が個人的に仲が悪いとか、そういうことはないんですが、学問的に申しますと、溝口先生という方は島田先生を一つの自分に先行する高い峰であると同時に、仮想敵といつてはちょっと言葉に語弊があるかもしれませんが、島田さんの業績を批判的に継承するような形で自己形成というか、自分の学問をつくっていかれた方だと思っておりますね。

たまたま日文研の大学院生でいらした銭国紅さんという中国人の方なんかも存じ上げていて、何かおもしろいかもしれないから聞きに来ないかというようなことを言われて、何人かの自分の先輩とか同窓生と一緒に勝手に押しかけてきたというか、それでそういうお話を伺ったということ、今でも鮮明にそのときの様子なんかも覚えております。

しかし、その後は特に関係はあまりなかったんですが、私の前任校で親しくさせていたでいた先生などがこちらの共同研究、小松先生の共同研究に加わっていたりとか、そういうことで、親しみはそれなりに覚えておりましたが、特に直接的な接触ということは、その一回だけでしたけれども、非常に思い出深いものになっております。

瀧井 ありがとうございます。

では最後に、榎本さん、一言お願いします。

榎本 榎本です。この中ではたぶん一番若い世代に属すると思います。僕が大学に入った年は一九九四年なんで、平成に入ってからです。ですので、もう既に日文研はいろんな一悶着を終えて、でき上がってしまった後でありました。ですので、先ほどから創設時以降に入った先生方のお話にあったいろんな騒動とかを聞き及んでいた先生方が若い頃にすごい悪い印象を持ったみたいなお話があったと思うんですが、僕の世代になるとそれもなかったのです。

ですので、こちらのほうに来ることも本当にほとんどありませんで、生まれて初めて来たのは、たぶん三〇代前半、それは数年前に大枝山のほうにちょっと来たことがあります。ただし、それはこの研究所に来たんじゃなくて、八〇〇年ぐらい前に、こちら辺に住んでいた坊さんがいまして、その坊さんがいたところを歩いてみようとして歩いて、その前にちょっとどこだろうと思って地図を見たら、国際日本文化研究センターというのが書いてあったんですね。あっ、ここにあったんだと、そこで知ったんですが、知りながら、その近くを歩きながら、うかつにそのまま帰っちゃったんです。というところで、それが私のファーストコンタクトと言えるのか、数年前にニアミスしたんだけれども、コンタクトせずに帰ったというのが私のそのときのことであります。こちらに着任したのが去年の一月付だったのですが、その前に着任が決まってから案内してもらうために来るまで、全くこちらのほうに来たことがありませんでした。

私はもともと日本史、日本中世史をやっていた者なんですけど、日本史の学会の人々たちが結成している学会が幾つかあって、そこから辺では概して評判が悪かったと聞いています。しかし

私は大変社交嫌いというか、あんまり人の中に入っていくたがらない人間でして、そういうところにはほとんど顔を出さなかった。顔を出しても仕事を振られそうになるとすぐどこかに行っちゃう、そんな感じで。結局、あまりそういうふうな愚痴とか中傷とかを聞くということがなかったもので、その点においては余計な先入観は全く来られたとは思っています。

ただ一方で、三〇代初めぐらいまでの頃に、こっちのほうに来る動機があるかというとなかなかなくて。学校、大学とか研究所とかのイメージとかを確かむ場合は、そこにいる大学院生とか同世代の連中とかと付き合う中から、いろいろと、ああそういうとこなんだ、そこは、あそこはおもしろいねとか、そこにはそんなおもしろい人がいるんだとかというのを聞く。さすがにいきなり二〇代のぼんぼんが、教授の先生から根掘り葉掘り聞くというのは大変恐ろしいので。その点では日文研にはそういう院生の数は圧倒的に少ないわけですから、なかなかそういうふうなお話を聞く機会もなくて。だから、私の中ではとにかく、何だろ、雲の上の先生たちが集まっているところという印象でした。僕の分野で言えば今谷明先生とか村井康彦先生がいらっしやった頃ですね。あと、先ほどから名前が出ていらっしやる梅原先生とか川勝先生とか、そういうユニークな研究をされているような方々、そういう方々がいるようなところだというふうな印象で来ました。

ただ、いろいろと言っています、早い話が何も知らずに来ました。どんなことになるのかなというふうに思って来たのですが、今のところは——今のところはという言い方はあれですね、大変満足しています。

基本的に今まで私は日本史研究施設の中で勉強してきて、そしてその後、東京大学の東洋文化研究所というアジアの研究を行う研究所がありまして、そこで助手もやりました。ここ

では、まだ私もそれほど深くいろんな研究会に出ているわけではないのですが、ちよくちよく自分と違う分野の人の発想に触れることができるという、こういう場というのはなかなかおもしろいなというのは、この一年間で感じているところでもあります。これがどれぐらい自分に反映できるのかというのは、自分のこれからの努力次第なんだろうと思いますが、それは自分の能力との相談かなと思っていますが。

そんなところで、私の日文研とのコンタクトでした。

瀧井 ありがとうございます。

きょうは非常に時間が押しているので、あと残りの時間で、ほかの牛村先生、伊東先生、榎本先生には、ぜひ私と一緒に聞き役になっていただいて、古参の先生方のいろいろな思い出話をお聞きしたいと思っておりますが。

既にいろいろな話題が出てきたのですが、とりあえずやはり創設期に何人か、我々にとってはおもう本当に、雲の上のような方々のお名前が出てきました。梅原先生、桑原先生、梅棹先生、中曽根元総理とか。それぞれその先生がこの研究所をつくるに当たって独自の構想というものを持っていらっちゃって、それがいろいろシンクロして、結果的に今の日文研ができたのではないかと、この間、二五年史の編纂に携わって思っているんですけども、そこら辺のそれぞれの先生が持っていた構想なり思いみたいなものについて、もうちょっと詳しくお聞きしたいなと思うのですが、それぞれの先生の思いというのはどの程度一緒で、どの程度違っていたのか。梅梅戦争の話はちょっと出ましたけれども、例えば桑原先生というのも、私はこの仕事を通じて初めて知ったんですけども、かなり一生懸命に取り組んでおられたんですね。先ほどの井上先生のお話にもありましたが、桑原先生がいなければ日文研はできなかったような

気もするんですけども、そういった点とかはどうなんでしょうか。どなたかサジェスションをいただけたらと思うんですが。

白幡 さっき井上さんが言われたのですが、ちょっと一言。桑原さんはもともと京都市を動かして、長らく都であった京都にやっぱり日本文化の一大研究センターがぜひ必要であるという考えを早くから言っておられたんですね。それで僕なんかでも学生のときから聞いていたんですが、梅棹さんは、さっき言われたように、国際性というか、要するに民博が全体として海外のことを研究のフィールドにしているということもあって、国際性を日本学の中にどういうふうに入れられるかということを考えておられた。

梅棹さんがもう一つ民博以外につくりたいというふうに考えておられたというか、かかわられたのが産業技術史博物館で、これは僕も吉田光邦さんから声をかけられて、井上さんが幹事をやっていた準備組織のメンバーになり、議論の場と呼ばれたりしたんですけど。一方、梅原さんは、当初確かに「研究協力」という、今、我々がまとめて日文研の国際的な関係の部分言っているわけですけど、それについては、ほぼというかほとんど考えておられなかったと思いますね。考えておられるとしたら、今さっきから出ているきら星のごときというか、海外にも日本人にはできない、ぬきんでた日本研究をやっている人がいる、こういう人たちとの交流を考えておられたと思う。そこで創設初期の教授たちが会いに行かれたのは、例えばオーストリアのアレクサンダー・スラヴィックという民族学、言語学の先生とか、それからフランスのベルナーク・フランクとか、仏教、仏像の専門家ですね。それから、イタリアのフォスコ・マラーニという文化人類学者。ヒマラヤの山登りを桑原さんと同じ時期にやっていて、マラーニさんはイタリア隊の登山隊の隊長をやっていたんですけど、桑原さんはチョゴリザ登頂

を目指す日本隊の、京都大学学士山岳会隊の隊長をやっていて、登山の同志なんだけど、両方日本学ということでも結ばれているという、そういう人を梅原さんも大変評価されて研究上の付き合いもやるという姿勢でした。

梅原さんには国内における個々人の研究の優秀な人を集めたいという発想があったと思いますし、桑原さんも基本的には個人研究を中心に、共同研究というのは個人研究を支えるような形でやりたいというイメージでしたし、梅棹さんは巾広い国際的学術交流が組織として必要だという考えだったと思います。つまり、日文研が今やっている個人研究、共同研究、研究協力というのは、梅原、桑原、梅棹という、日本研究についてそれぞれ重心のかけ方が違う三つぐらいに分かれている考え方がもとになり、それがまじってここができ上がっているという感じを僕は持っています。

一番強かったというか、情熱的だったのはもちろん梅原先生。ただ梅原さんの場合は、研究協力というか国際的な（外国人との）共同研究をどれぐらいプランされていたかはわかりませんが、実際やっていくにあたっては、外国人の研究者とは付き合うけど、一般に他の研究者のために研究協力をやるというのは負担が大き過ぎるというので、皆あんまり喜ばなかった。これを日文研メンバーにやってもらうにはどうしたらいいか、うまくすんなり受け入れてもらえるような論理をつくり出すのに苦労したというか、考えていたと思います。

研究協力というのは、それが目的ではなくて、研究の進展が目的である。ここの研究所の名前で言えば、桑原さんは日本文化研究所とずっと言っておられましたし、センターとなるといわゆる交流や人のサポートが主要業務としていっぱい入ってきて、それは困る。梅棹さんは海外サポートを忘れるなという発想でしたし、その業務をやってこそ予算は来るけれども、我々

の負担になりすぎないような仕事の割り振りはどうしたらいいかを考えました。

当初いろんな人との議論のなかで出ていたプランで、やっぱりできなかったのはもつと、例えば研究所全体が、一丸となって特別研究をやるといったような、この研究所ならではの研究をやる目標を一つ掲げていたんですけど、それはうまくいかなかったなという気がする。歴代所長がいろいろ肝いりになってやられたけど、それができなかった。これ、できなくて当然、できなくてよかったとも言える。

あともう一つは、今、榎本さんの話を聞いていて思ったのですが、榎本さんにとっては理想の研究環境がつけられているんじゃないかという印象がある。メンバーにとっての今の日文研を割に評価してくれている意見を聞いてうれしかった。喜んで今、日文研生活をエンジョイしているように見える。そういうものをつくろうとしてやってきたのがそれなりに成功しているなら喜ばしいことだ。必ずしも全員に好ましい環境ができていくかどうかわからないけれど。

初期に、日文研の裏の名前は遊民センターであるべしとの意見がずっとありました。日本文化研究センターではなくて遊民センターであると。好きなことをやれる理想環境を目ざそうと。これがもうひとつできていないことですね。今、いつも会議に追われているでしょう。何という情けない状況であろうか。遊民センターとしては出来が大変悪い。幾つかできていないこととしてはそんなところですよ。

井上 桑原先生は、晩年、文化勲章に目がくらんだという人がいます。これはすごい意地悪な言い方やけれども、その面がなくはなかった。僕は聞いて、はあっと思ったんですけど、亡くならはった多田道太郎さんが尋ねはったんですよ。「桑原先生ともあろう方が、どうしてそういうことに気持ち奪われるんだ」と。すると、こう答えはった。「多田君、君たちはおもしろい

ものを食べたらいよいよと感じられるだろう。だけど、もう自分の年になると、もうそんなことがない。もうこういうことしか楽しめへんのや」って。何て正直な方やと思いましたがね……。

鶴見俊輔にも言われたことがあります。桑原さんのことを日文研絡みで勲章に目がくらんだと揶揄する向きもあるけれども、それは間違っている。桑原先生は、ベトナム戦争の脱走米兵をかくまう自分たちにも快く力をかしてくれました。あれは、もし叙勲レースを争うなら、明らかにハンディキャップになると。桑原さんにはそのハンディキャップマッチレースを楽しみむゆとりがあったんだ、というふうな言い方を鶴見さんにされたことがあります。だけど、鶴見さんの目にも、晩年の桑原さんはやや政治的なことに興味を移していたというふうに見えたのかもしれない。日文研には、桑原さんをそういう方向へむけてしまった面があるかもしれないことを、私はかみしめておきたいですね。

そうそう、梅棹さんに言われたことを、もう一つふりかえっておきましょう。日文研構想が、民族主義者の企画やとたたかかれていた頃のことですよ。私は、こう論ざれました。民博ができる时候にも反対したやつはいっぱいおる。あれは、帝国主義の出先やか、梅棹も大日本帝国の出先機関である西北研究所にいた、つまり帝国主義のお先棒をかついでた、そんな批判したやつはいっぱいおると。そんな批判をしたやつが、今、民博の若い研究者になつとると。時が移ればそうなるんやというふうに言われました。ああ、これがリアリズムなんやなあ、というふうに思いましたね。大きい組織をつくるのは、こういう冷めた人なんだとも思い知りしました。

あと、これは白幡さんも一緒やったと思うけど、朝日新聞で日文研ができることをめぐって、梅原さんが左翼の歴史家と対談をするという話がありましたよね。で、その相手を一度、

大江志乃夫が引き受けたんだけど、途中で蹴ったんですよ。やっぱり出たくないと思ったんでしょう。もう対談の期日が迫っている、何とかならんかというふう慌てふためいているときに、私は鶴見俊輔さんを存じあげていたので、鶴見さんの名前を挙げたら、「それだ、井上君」ていうて連れていかれたよね、鶴見邸まで。私達は梅原さんの用心棒のような格好で、鶴見邸にまでくっついていきました。鶴見さん、思わはったやろうな。「井上君もこんなところでしょこまかするよう人間になったのか」と。でも、渋々、対談を引き受けてくれはって。だけど、その対談のやりとりには梅原さんが怒らはって、「鶴見君はいかんかった」とか言うてはったけれども。

白幡 対談というのは、あれはドナルド・キーンさんと鶴見さんと梅原さんの三者の鼎談。

井上 鼎談か。

白幡 ドナルド・キーンさんがまた、日文研設立に関してかなり厳しいことを言っておられて、しかしその後、初代の客員で来ていただいたんですよ。

井上 その手厳しい内容とはまた違う事情で、キーンさん。ここには馴染まはらへんかったと思いますけれども。

そのときに私は、感じたんですよ。普段、梅原先生はたぶん鶴見さんのことをよくは思っていないんじゃないだろう。だけど、どう言うたらいいのかな、立場とか思想を超えたところにある、おんなじ京都という場所を過ごしたというようなつながりみたいなものは、やっぱりあったと思うな。あとね、あのきわどいタイミングで、本人がいるかどうか分からん鶴見邸へとかくいこうという梅原先生の決断力。器が大きいなと思いました。事を成し遂げるのは、ああいう人やね。

これも、よく言われていることやけど、桑原武夫は、自分の周りにいる人の中では、梅棹と鶴見が最も頭がよいと、よく語っていた。でも、そのラインナップに梅原は一度も顔を出さなかったと。これが梅原先生のばねになったというふうに、梅原さん自身から聞いたことがあります。鶴見さんからも、言われましたね。若い頃、毎週、京大の北側にある進々堂という喫茶店で梅棹さんと語り合うことがあった。今、思い出せば、それが若いときに一番自分の頭の回転がよかった時期だと。梅棹さん自身も同じことを言うたはりましたよ。進々堂で語り合った鶴見俊輔の思い出を。もう今は全然違う人生を歩むようになったけれども、あの頃が自分の頭の華だったというふうに。一見相入れそうもない知性が、ふれあえる。私はそういう京都に、ノスタルジーをいただきますね。

白幡 大事で、できてないことの一つは、鈴木さんがさっき言ったナショナルリズムの拠点になるのでは、という懸念への完全解答ですよね。国費でもって、その国の文化を研究する組織というのは本当に可能かどうか、客観的に可能かどうか。これにはやっぱり、文句が出ると想像して、みんなが熱心に議論したのを覚えていますね。だから、調査もしましたよ。各国に自国研究のための国費丸がかえの機関はあったのか、あるのか。それで調べたら、あったことはあったし、またあることはあるんです。あることはあるんですけど、全体主義国家か、共産主義国か、そういうところしか国費で国のことを研究するメンバーを集めて一つの研究所をつくってというところはないと。しかもそれは、よく見ると、どれも学術的ではなくて、例えば研究紀要とか、そういう学術報告などは出していなくて、プロパガンダの発信と政治宣伝パンフばかり出しておると。

日文研はそういうものではないから、世界で初めての試みだから、むしろこれ頑張ってる

うかという、そういう議論があった。ただ、それが今、成功したと言えるか。今でも、僕は鈴木さんの言われるとおりだったと思うんですけども、なかなか海外での誤解と悪宣伝は完全には払拭できていないと思いますよ。

鈴木 今、白幡さんと井上さんがおっしゃったように、日文研は東京ではできなかったんだと思います。学会のボスが互いに牽制しあう中央ではなく、京都というところでの文化人、学者のある種の連帯連携がなければできなかった。文部省は戦前から、純粹の研究所って、理系しか認めていないのですよ。文科系で一つも認めていない。共同利用機関はみな、博物館とか資料館とか、何かの任務がくっついているわけでしょう。ぶっちゃけた話をしちゃうと。日文研には、僕らの言う研究協力、外国人の日本研究者に研究サービスを提供するという仕事がついているわけです。それが民博や歴博の博物館、国文学研究資料館だったら資料の管理、それにあたる仕事です。そういう大義名分が不可欠で、それがないと成り立たないのです。

井上 梅棹さんはその辺、機転がきくんでしょうね、そういうとき。今求められているのはこれやというのを。

鈴木 そこはわかっていたらと思うのね。いわば、必要条件と十分条件をどうかみ合わせてゆくか、ということだと思っただけです。

井上 梅原先生の場合は、京大の哲学科でギリシャ語を読まされたりラテン語を読まされたり、何でこんなことばかりやらなあかんのやという思いが、どうして日本文化を研究しないんだというのにつながっていると思う。梅原先生は、それが情熱になっていると思うんです。

鈴木 個々人の情熱はよくわかるし、いろいろな考え方がうまくかみ合ったというのはそのとおりだけど、私たちがなぜここにいられるのか、この建物はどうしてできたのかといったら、

その大義名分があるからでしょう。それを忘れたら、ここは成り立たないのですよ。

思い出話に戻ります。ちょっと、国際情勢が、このところ、八〇年代から、がたがた変化しているでしょう。それが研究者にもひりひりするぐらい、ここにいと伝わってくるんですよ。たとえば、チェコスロバキアという国があったでしょう。チェコから共産党系の親日派の研究者が来てました。その次の年に、ビロード革命の大統領の親友という人が来た。この二人は、もちろん、国に帰ったら牢屋に入れあうような関係ですね。僕らは両方とも、お迎えするわけですね。前の年にポーハチユバ先生が来ていて、こんなお話ししましたと言っただけで、フィアラさんは三ヶ月、私と口きいてくれなかった。実際にあった話ですよ。

それは、日文研が全方位で構えたから、起こったことなのです。全方位で行くしかないのではないかと私は思っています。もちろん個人的には、いろいろなつきあい方があってよい。けれども研究所全体として、偏りが出ないように気を配ってゆかないと。それがこの国際戦略と言っつてよいと思います。

今日だってエジプトで騒ぎが起きた。メールが通じるようになったら、すぐ「先生、私は生きてます」って、若い人が知らせをくれる。そういう関係をどこもつくっておかないと。白幡さんの悩みは、僕らもずっと悩んできたことだけど、その建前の部分をしっかりとつくとおいて、それではじめて言えることなんじゃないですか。

そして、韓国の精神文化研究院（現、韓国学中央研究院）みたいなところが日文研みたいなふうになりたいと言ってきたり、中国、武漢の伝統文化研究所の人たちとも連携ができたりする。もちろん、国情がちがうから、うちみたいにはできないけれども、ああいうやり方があるんだ、ということ、学んで帰ってもらえるようになった。大学院教育でもインターナシヨナ

ルなやり方を目玉にしていこうというところがあちこちに出てきている。僕らにとっては、言ってしまうと、負担の大きいことだけれども、それなりにおもしろい経験もいろいろしてきたわけですし、それが自分の研究の肥やしにもなっている。

白幡 夢かもしれないけど、私は日本文化研究所がよろしいと思っています。何で後からできた地球研が総合地球環境学「研究所」になっとるんやと。あそこは何かほかにもっと国際的に必要な任務とか、例えば環境学上で日本の立場を説明する任務などを名称に反映させるべきではないか。

井上 これ、活字になるらしいよ。

白幡 まあ、いいんです。このことは地球研が設立されるときもそう言ったんです。なんで研究所になれるのかと。今、鈴木さんが説明したけど、やっぱり理科系は研究だけでも比較的許されるんですよ。文科系は何か別のことを、業務をやれと。それで認めてやろうという感じなんです。だから資料収集だとか、あるいは研究協力だとか。我々は最初、研究協力なしの研究所を夢見ていたんです。

もう一つついでに言うと、大学院も要らん。梅原さんは「研究協力は梅棹さんの言うとおりだ」というふうに、たぶんどこかでおっしゃってたと思いますが、研究協力をやるという任務を掲げたおかげで、創設準備がものすごくスピードアップされて日文研が早くでき上がったのは間違いないと思います。

その次に、重点化に後押しされて日文研は予算的にも豊かになって、しかもそれがずっと続した。それはやっぱり大学院を持ったということですね。京大人文研のメンバーは多くが反対したでしょう。ほぼ全員が大学院を担当しない意見だったという。日文研の私も持たない派

だったんですけれど、これは流れに乗るべきであるという感じで妥協して、それが、プラスももちろん生んでいるわけです。負担は大きいけれども、やっぱり何とかうまくいっているという感じはあるんですよ。だから、なかなか純粋な研究所のあり方を追求できていない。実際とは、なかなかうまくマッチしてないところもある、そういう思いを持っています。

瀧井 今のお話を聞いていたら、結構、当時の文部省の考えていることにうまく乗ってここまできたという部分もあるのかなと。いわゆる文部省としては教授会自治というものをつぶして、トップダウンで運営できるような、そういう高等教育研究機関をつくりたいという路線があったと思うんです。それとあと、単に研究するだけではなくて、何か国益のために貢献できるような、そういう文教施設です。そういう国際協力や研究支援というところにうまく——当初は方便として使ったのかどうか知りませんが——それに乗って、今の繁栄ないし我々の苦勞もあるということかもしれません。

ちょっとここで、小松先生はずっと阪大のときも日本学科ということで、ある意味、日文研のできる前からずっと日本学という枠組みでやってこられていたわけですけれども、今のお話とかを聞いて何かご感想とかありますか。

小松 そうですね、幾つかの異なった観点からお話することになります。留学生の増加の問題がありますが、これは日本の経済的な発展と深く関係しているんですね。それまでは日本のことに関心を持つ人は、どちらかといえばヨーロッパ人が多かった。遠く離れた不思議な国の日本みたいな、日本に興味を持ったような人たちが、大学なんかで研究しているというような印象があったわけですが、高度成長期以後ぐらいいからアジアからたくさん留学生が来るようになったんですね。

長い日本研究の歴史を持ったところから来ていただくのだったらいいんだけども、そういうような日本語もよくうまくしゃべれないような者に対しての教育システムがほとんどできていないところに、留学生をどんどん増やしていった。ところが、旧帝大的なところというのはあまりそういうことに関心なかったんですね。ちゃんと日本語ができる人、専門書を読める人、そういう人じゃないとうちでは受け入れませんと受け入れを断っていた。

当時の文部省では、そういう状態を克服しようとしていて適当な大学を探しており、筑波大学とか阪大が手を挙げた。文化人類学をやっていると、日本研究者と出会うことは実は意外に少ないんですね。ところが、留学生コースだといろんな国の人たちがやってきて、いろんな日本研究者たちに出会う機会ができる。つまり国際的な研究をやっているのは、そういうような日本文化研究をやって教えるような大学院生なんかを抱えるところなんだというようなことに気がつきました。たまたま縁があって阪大から声をかけられたときに、「留学生がたくさんいます」というのが決め手になって赴任したのでした。幸い僕なんか雑学的な勉強をやっていたので、そういうところで留学生たちと日本人の学生たちの両方を相手に勉強できるというのは、非常に新しい、日本の中で言えば新しい環境だというようなことで興味深く思ったんですね。

それと並行するような形で日文研、先ほどで言えば日本研究所というような形でそういうものができるといふふうに新聞なんかで聞いたりしたときに、これを僕はこういふふうに考えたんですね。今、留学してきている学生たちがやがて国に帰って大学の先生になる。そしてまた日本研究の弟子たちを育てるときに、その先生方、留学までいいとして、大学に勤めて助教授になったり教授になったりした後の、その先生方のいわばサポートをするような、窓口にな

るようなところというのは、どこかになきゃいけないんだけれども、少なくとも、僕の印象ですけれども、東京大学だとか京都大学だとかというようなところは、そういうことに本気でまだ取り組んでいなかった。その中で日文研というのはそういう役割をしてくれるんじゃないかと。

例えば僕がある留学生を博士課程まで見て、国に帰った。そうすると、その人たちが自分の弟子なんかも育てながら、また日本で研究をもう一回したりする。あるいは何か相談に来たりする。より高度な知識を得るような場所としての研究所があるのは非常に大事なことだろうというふうに思っていたので、日文研には関心は持っておりました。

ただ、先ほど話題にも出ておりましたように、日文研がつくられていく過程では、国策的な研究所ではないかという噂もあって、そういうところだったら行きたくないとか、それだったら恐らく留学生は嫌がるんじゃないかとかいうようなことは思っていました。

ただ、私の日文研に対する期待というのは、たくさんの方の日本研究者がいろんな形でこれから増えてくる、留学生も増えてくる。そのためのある意味では非常に重要な役割を果たしてほしくないあとというふうなことは、もう阪大にいた頃から思っていました。そういう意味では、ちょうど私などはある程度の留学生を育てて、彼らが国に帰ったりして、そういう人たちのある意味ではネットワークですかね、日本研究者のネットワークを見ながら、日文研の中でそういう、いわば、どちらかといえばアジアなんかの日本研究者なんかに対してできるだけサポートしていこうというふうなことは考えてきたつもりなんです。一緒に走ってきたという感じもします。

まだまだほんとに留学生を受け入れる機関、大学がない時代に、日本学科というのはそれに

応えようとしてきた珍しいコースでした。そういうことが僕の頭の中にあっただので、民博だとか歴博なんかよりも、こちらの研究所のほうが、自分が教師生活をやった中で言えば合っている場所だという感じはしましたね。もしも二つあって、日文研と例えば民博と両方声がかかったら、僕は人類学者だけど、やっぱりこっちのほうがいいなという感じはありましたね。

井上 なんとという、言いよう。わざわざ記録に残そうとしているでしょう。

瀧井 今の発言は絶対にカットしないでおきましょう。そのようなことでは牛村先生も似ていますね。東大の駒場の比較文学比較文化は、似たようなポジションですし、その後はシカゴのほうで、外から日本研究を見るところという立場を得られていたと思うんですけども、そういうった観点から今の小松先生のお話というのは、どのようにお聞きになりましたか。

牛村 日文研に研究協力という制度が入ったというのは、さっき白幡先生の話で初めてよくわかったと私は思いました。東大の駒場もそうですし、いろいろ日本研究を広く行う施設は日本にもあるし、外国にもあると思います。ただ、外国の場合ははっきり申し上げて、一部をのぞいてレベルがまだまだと感じます。一人の教授が古代から現代まで文学を持たなきゃいけない。歴史も同じであると。例えば私はカナダにいたときに、時々秘書から呼ばれて「こんな電話があるので答えてくれ」。出ると「ヤマンバって何ですか」とか。外国の日本研究の平均レベルというのはわかりませんが、そういう百科事典レベル。簡単な百科事典の役割を果たすところがあるかと思うんです。

一方、じゃあ日本はどうかというのと、日本の施設はありますが、自分側のサポートがあまりできていないんじゃないかなという気がします。ここは研究所ですから教務課がないのは当たり前なんですけど、よその大学と比べてみて、やっぱり教務課がないというのは初めはちょっと

と驚きました。そのかわり、どんと研究協力課というのがある。その研究協力課が親しい課であるということは、研協という略称が非常に身近なものであるということを語っているんじゃないかと思うんです。

笑い話ですけど、赴任して二週間後、あちらにいらっしゃるカーンさんが私のところにいらして、「七月の日文研フォーラムの司会をやってください」と。いろいろ詳細をお話くださって、「あとは詳しくはケンキョの喜多川さんに聞いてね」と聞いたとき、「あっ、日文研では人の名前の前に性格をあらわす語をつけるんだ」と思いました。「謙虚の喜多川さん」と思ったんですが、ご本人からメールが来て「研協」とあったので、あっ、このことかと思いました。それほど我々の日常活動に研究協力というのが根づいている。それがあれば他大学との差異化が可能だし、東大・駒場は残念ながらその辺はないです。教室の事務スタッフが研究協力をも担当している。あとは普通の教務課が担当しているにすぎないと思います。

瀧井 私だけが聞いてばかりなので、伊東先生、榎本先生のほうから何か。いろいろ創設の細かいエピソードみたいな話も出ましたし、あるいは意味不明な発言とかもあったかと思いますが、それってどういうことなんですかということでも結構です。

白幡 僕は、研究協力ってかなわんとか、いろいろ本音のことも聞きたいんですけど。研究協力という名前に落ち着くまでにはだいぶ議論があった。半年、一年ぐらいかかったと思います。最初は研究サービスト。それから相談サービストというふうになって、要するに今、牛村さんが言ったように、本当に百科事典のようなことを聞かれても一々答えるようなサービストをしましょう、そういうことを一方では考えていたんですね。そんな仕事をもとに研究費をいただく。

井上 初期は、あれで、地域分担をしましたね。

白幡 試みに、半分冗談で地域分担しました。実現してないんですけど。井上さんは初代アフリカ担当であつたんですけど、一回もアフリカ行ってへんのと違う。いつ行った。

井上 一番仕事せんでええやろうと思うて選んだんです。

白幡 そうそう。だからみんなわかつて、やったんです。地域担当というのもつくってみようか、とね。だけど結局、初期には一応担当区域があつたと思いますけど、一〇年ぐらい、続いてたんじゃないですか。

必要ないという考えもあるけど、僕はある程度イメージをしておいてもいいと思う。それからこの間、研究の枠組みとしての五域・三軸、もうあんなもんは共同研究をむしろ縛る枠組みであつたというような意見が出ていましたけれど、初めはやっぱり予算をちゃんともらうためには、片寄りなく研究をやっていますという証明が要つたわけで、そのためのマニュアルみたいなもんなんです。

そういう用語が飛び交うので途惑っている人もいます。新たに來られた人は、その辺はどういうふうに理解されているのですか。

瀧井 日文研ジャーゴンをつくらうとかという話が当初ありましたか…。

白幡 「謙虚」じゃなくて「研協」であるとか。

瀧井 私はちょっと、そんな内輪受けなものはやめたほうがいいんじゃないかと前から思っていたんですけど。ただ、確かにジャーゴンが多いなというのがありますけれども、最初に赴任されてきて何か面食らつた言葉とかありますか。何じゃこれかと思つた言葉とか、ございますか。

鈴木 言葉もそうだけど、ここは、それ以前に組織がわからないでしょう。いろいろな経緯があるのだけれど。最も大きいのは講座制とか部門制をつくらなかったということね。それから、このぐらいの規模に留めた方がよいか、そういう大事な判断が創立期になされているんですよ。

白幡 鈴木さんはそう思ったかもしれないけど、梅原さんは教官倍増計画を出してきたでしょう。

鈴木 私自身がそのとき反対できるほど明確なヴィジョンがあったわけではない。

白幡 してなかったかな。

鈴木 違う違う。

白幡 したんじゃない。

鈴木 山田慶児先生がはっきりと、倍増なんかしたらあかん、と。

白幡 僕も反対だった。

鈴木 要するに、一つの組織が互いの顔が見えなくなったらだめという意味です。

白幡 鈴木さんの共同研究、六〇人ぐらいおるでしょう。

鈴木 あれは顔が見えなくてもいいやり方をしている。

白幡 梅原研究所は倍増で六〇人にしようとした。

鈴木 サテライトはさまざまな規模のものがあつた方がいいわけでしょう。ひとつの機関を部門制に分けてしまうと、同じ仕事を分け合うとか、誰かがサボっても代行できるとか、それができなくなるでしょう。山田慶児先生、園田さんから参謀格の人たちが合意形成しながらつくってきたことがとても大きいと思うのですよ。

さっき言ったのは全方位外交ということね。それから、日文研は世界の日本研究をリードしてはならないという基本姿勢もそうです。研究情報のセンターにはなりますが、日文研は何かの旗を振らない。もちろん個々人はやっていいんですよ、自分の研究は旗を立てても、日文研として、組織としてこれが日本研究ですというのは示さないということ、そういう大事な基本姿勢が蓄積されてきているのですね。それが不文律の、日文研の精神みたいなものだと思うんだけど、これは一つ狂うととんでもないことになりますよね。今日、国際協力とか学際性とか、みんなこの大学でもやっているけれども、それで、こんな成果が出ています、と言えるような成果をうちは出していかなくてはならない、とんでもない重いオブリゲーションを負っていると考えた方がよい。逆にいうとそれさえ出していけばいいわけです。

もう時間がないので最後に学際研究について言っておくと、私は、ちよつと日文研にオーバーコミットしすぎかもしれないけど、個別の専門研究に還元できるような成果を出すべきだと思っているんです。ほかの分野とあわせて研究した成果によって、各専門分野の自身が変えられるということですね。そのような学際的な共同研究をたえず日文研が開発してゆくことが問われていると思っています。これが大事だと思っています。新しくここに来る人たちが、いつもそのプレッシャーの下で新しい仕事をやっていけるという状態をつくるべきでしょう。場所のもついい意味での圧力というものをつくっていかなきやいけないんじゃないかなというふうに思います。

小松 これは感想ですけど、確かに今、共同研究会はいい意味でのプレッシャーがあつてすぐく進んでいますよね。けれども、その一方では業務がよく見えない。

僕は園田さんと、日文研に来たころよくけんかしてたんですね。会議のやり方が大学のやり

方とまるで違う。一番僕が今でも腹が立っているのは、前回の会議に欠席した人が、その会議で決まったのに次の会議に出て来て、「おれは聞いてない、おれの考え通りにせよ」みたいな発言をすることがしょっちゅう起きるんですね。これほど欠席した人が威張る研究所というのは、これは危ないなあと思うんですね。

いつも園田さんは、おまえの来る前はこうだった、草創期はこうだ、これに決まっているんだから、おまえは後から来たか前からのに従え、という。これが非常に嫌で、大げんかしたんですよ。だいぶこういうことを言う人が減ったんだとは思うんですけど。

鈴木 絶えず言ったほうがいいんだよ。変えるべきところは何故、変えるのかをはっきりさせて、変える。

小松 そうですね。だから、後から来た人ももっと頑張って、それはやめてくださいとか、そういうのを。すぐ印籠みたいなものを出すとか。我々もきつとやっていると思うんですよ。

井上 今、おびえられているのかもしれない。

小松 僕もきつとそうだと思います。昔のことを知っていると、ついついこうなっちゃう。ちゃんと説明をしていかないと、すぐく断絶ができると思う。

瀧井 私、ここに赴任した当初すぐだったんですけど、ある名誉教授の先生と東京のある会合でお会いする機会があって、そのときに自己紹介して、「今度、日文研に赴任した瀧井といいます」と言ったら、その名誉教授の先生が開口一番「相変わらず会議は多いか」と言われました。「僕は前任校から移って、何だこころはと思って梅原さんに直訴して、委員会を半分減らしてもらったんだ」とおっしゃいました。確かに会議が多いなということは、私がこれまで所属していた大学とかに比べて思うことなんですけれども。

ただ、そこには良い面もあって、前のところでは裏委員会とか裏執行部とか何かありまして、そこで全部決められるんです。つまり、非常に政治の領域が大きいといえますか。これは部門制をとったら、そこでもう政治というものがいろいろ入りますね。予算とかパイの奪い合いとか。そこら辺は風通しのいい組織だなというふうなことは非常に思いました。それが一つ、こちらに移ってきたときの、今も思っているすがすがしい思いなんですけど。

井上 風が吹きすさぶこともあるけどね。

瀧井 いいときも悪いときもあるということかもしれません。

そういうふうな何かいまだに持っている、これまでの先生の大学時代とかと比べてやりやすい面とかやりにくい面とかというのはありますか。例えば伊東先生とか、いかがでしょうか。

伊東 私も大凡瀧井先生と似たような感想で、大体最初入ってきますと、日文研はまず建築が一階だと思っ歩いてると二階だったりとか、まずそういう構造もよくわからないところがあるんですけど、確かに組織もちょっとよくわからないところがあるんですけど。これは、批判ではないのですが、かといって、特に困ることもないんですけど、誰も特に教えてくれるというわけでもなく、ただやっぱり風通しがいいというのは、これはよく感じますね。私の前任校は私立大学でしたので、いわゆる国立大学の講座制のようではないんですけど、やっぱり学部、学科、専攻みたいなものがありますと、どなたか定年退職とか、ほかに移籍されて、例えばフランス語やドイツ語の先生がやめられたというところ、そこがまた今度、今、中国語履修者が増えているから中国語を何とか取りたいとか、政治というところ、確執がいろいろあって、会議は前のところのほうが全然長かったですね。さまざまな改組とか、大学院をつくるのか、年中そういうことをやっておりまして、それから見ると何かこちらは、所員会議は決定権はないと

いうことらしいんですが、何か先生方、談笑されていらしたりとかして、誰も怒鳴る方も、命令したりとか用事を頼んでくる方もいなくて、ある意味で非常に好き勝手やらせていただいで。

井上 執行部に入らしたら、気持ち変わりますよ。

伊東 いやいや、それはわかります。まだ楽をさせていただいているということは、よくわかります。

で、そういう一兵卒というか、新兵の立場から見ると、ちょっと先輩の方とかの、チャップリンの映画か何かで軍隊に入った新兵みたいな感じで、先輩がこうやったら、ああこうやるんだかと思っ、それをちょっとまねたりとか、そんなことをやりながらだんだん水に慣れさせていたってきているのかなというか、そういうのが感想です。そういう何か、一人が一国一城ということではないんでしょうけれども、一人一人の自由度が高いんじゃないかなという気がしています。

瀧井 ありがとうございます。

榎本さんは、給料をもらうようになったのは、ここが最初ですか。

榎本 助手がありました。

瀧井 ああ、助手ですか。

榎本 昔やっていたところが助手だったので、その手の会議はもう一切出なかったのです。だから、今こういう会議がある意味とこののを全然考えたことなかったんですが、今お話を聞いて、ああそういうことかと。何か政治の面とかを極力そういうところで動かないようにしているということならば、この委員会の数も、ある意味で積極的な意味があるんだなあとということ

を今知りました。

鈴木 学部の授業をしなくていい。卒論指導もない。その分、研究協力と共同研究、組織運営が給料の分でしょう。楽しみにしているわけじゃなくて、しょうがなくてやっているんです。

白幡 会議でものが決まらない。

鈴木 そうそう。

榎本 減らせれば、もちろんそのほうが助かりますがね。

牛村 会議は多くても、一人の発言が短いのが日文研の特徴だと思っんです。若干名例外がいますけど、基本的に皆さん短いですよ。早く終わりにしようという気持ち根底にある証だと思っんです。

鈴木 だって、でかい教授会で延々付き合わなくてはならないところと比べたら、まだ。

白幡 まだましかな。

鈴木 そういうこと。自分たちでやり方を決められるのですよ、ここは。もちろん、アカウントビリティーは問われますが。

瀧井 ここでちょっと、せっかく公開にしているんですから、もしフロアのほうから何か聞きたいということがありましたら、どうぞ。何か創設の頃のエピソードなり経緯なりについて、何か聞きたいなことがありましたら、ご発言いただけたらと思っますが、いかがでしょう。何かありましたら。

ローゼンバウム 簡単に聞きますけど、それぞれの先生たちが海外で勤めた経験を持っていると思っんですけど、それと日文研と比べたら、どういうような目立っったところがあるんですか。それをちょっと聞きたいんですけど。

白幡 僕はそれを喜んで言いたいと思っっているんですけど、我々が海外に行つてサービスを受けることはあんまりない、ほとんどないと思うんです。私はケンブリッジに行きました。それからパリの高等研究所も行ったんですけど、どこでも要するに自分でやれですよ、大体。研究は自由にやってくれということですね。日本は何か細かいことをいっばいサービスし過ぎていゝるんじゃないかと思つて、そこに海外の組織との大きな差があつて、どちらが結果的によいかはわかりませんが、日本はえらくサービスし過ぎて、むしろ研究者の迷惑になつてゐるんじゃないかなという不安を持っていますけどね。

鈴木 日文研のこと？

小松 日文研が特別なんですよ。

白幡 かもしれません。

小松 ほかの大学は部屋もろくにもらえないでしょうね。どこか海外に出ている先生の部屋をちよつと借りるとか、そんな感じで、日文研のような研究室を、しかもたぐさんのサービスを受けながら使えるところは、あんまりないんじゃないですかね。

井上 ここ、通常の文科省の施設と比べると、たぶん坪単価は一・五倍ぐらいになるんですよ。何でそれだけの坪単価を獲得することができたかというところ、外国の研究者に快適に過ごしていただきたいという名目があるからですよ。それで、これだけぜいたくな施設ができたんです。

小松 なるほどね。やっぱり快適に過ごしてもらわないといけないわけだよな。

井上 そういうことになります。施設費算出の理念はそういうふうなことで。

白幡 各人の研究室の面積も計算して、皆が完全に同一になる案にしたんだけど、外国人用の

研究室は、同じようにできないと言われました。つまり、半年とか一年しかおられない先生だからというので、ちょっと減らされていますけど。一応皆さん、それぞれ二五平米が基準ですね。

それで、それぞれの研究室の面積を一部割いたのをまとめてつくったのが、コモンスルームというところで、だからみんな使ってよろしいということになるわけです。日文研のサービスは、よ過ぎるのかな。

瀧井 鈴木先生はいかがですか。

鈴木 要するに、人間文化研究機構の一組織となっても、どれだけこれまでの日文研のよさを保持していけるか、それがこれから問われていることだと思います。

瀧井 もしほかにあと一人ぐらいいらっしゃったら。よろしいでしょうか。

小松 所長、講評を。

猪木 ちょっと喉の調子が悪いんですね。もう重要なポイントはすべて出ていると思うんですけど、二つだけ、私自身の個人的な感想を補足します。

一つは、八七年、八八年あたりに日文研が設立されたというのと、八〇年代、輸出の増大で海外市場を脅した日本はご存じのように世界で非常にパッシングに遭い、そして日本国内では日本文化特殊論が跋扈して、アイデンティティーという言葉、私、あまり好きじゃないんだけど、日本とは何かという議論が盛り上がっていた時期だと思っんですね。それと本当に正確に日本のことを海外、内外の人に研究してもらって、学術的な交流のできる研究機関が必要だという認識とが非常にマッチしたという点。これは因果関係かどうかわからないんだけど、重要な点だと思いますね。

それともう一つは、いろんな分野の方がおられて、私も狭い意味での経済学は全然研究として進まなくなった。特に若い大学院生なんかと話ができる機会がこっちに移ってなくなつたというので、確かに寂しい思ひはしました。しかしどの学問も非常に専門化して、与えられたフレームワークの中で業績を上げていく。そのフレームワーク自体、あるいは概念自体を広げたり変えるということにコミットしたくないという人が非常に増えているんですね。若い人は優秀であればあるほど、その狭い分野で早く認められたいという気持ちは強くなるものです。

そういう意味ではこの日文研は、これは雑談、雑学、耳学問というふうには呼んでもいいんですが、違う分野の人と交流することであるいろいろなヒントが得られる。各々の学問分野では関心が狭くなり、専門化が進む方へと振り子が振り始めているとは感じるんです。やっぱり他分野の研究者と話ができる、そういう意味では魅力のある、将来性の大きい組織だというふうには私は感じています。

その二点、ちょっと補足しました。

瀧井 どうもありがとうございます。

予定の時間をオーバーしてしまつて、この後に報道懇談会も控えていたのに無理を言つてしまいました。司会の不手際で、もっといろいろなお話が引き出せたかもしれないですけども、しかし大変おもしろいエピソードやお話を聞くことができました。ご登場願つた先生、本当にありがとうございます。

では、きょうの第一回目の二五年史の座談会はこれでおしまいにいたします。来月も第二弾を企画しておりますので、また皆さん、アナウンスメントにご注意ください。よろしくお願ひします。どうもありがとうございます。

パネリスト

伊東貴之（国際日本文化研究センター教授）

井上章一（国際日本文化研究センター教授）

牛村圭（国際日本文化研究センター教授）

榎本渉（国際日本文化研究センター准教授）

小松和彦（国際日本文化研究センター教授）

白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）

鈴木貞美（国際日本文化研究センター教授）

司会

瀧井一博（国際日本文化研究センター准教授）

フロアーからの発言者

ローマン・ローゼンバウム（シドニー大学名誉アソシエイト／

国際日本文化研究センター外国人研究員）

講評

猪木武徳（国際日本文化研究センター所長）